「生まれてきてくれて、ありがとう」
すやすやと眠る寝顔
ぎゅっと指を握る力の強さに
お父さんやお母さんは
わが子への、この上ない愛情で胸をいっぱいにして
赤ちゃんを見つめていたはずです

でも、いつの間にか
日々の忙しさの中で
その目をそらしてはいないでしょうか

子育てが難しくなった
そういわれる時代の中で
子育てしやすいまちをつくっていくために

「内子で育てること」
「内子を育てること」
「内子に育てること」

まち全体で、内子の子育てを考えていきましょう

◉特集　内子育て

子育ての現実

今、お母さんたちは子育てについてさまざまな悩みを抱えています。より良い子育てを実現するためには、どうすればよいのか――。子育て中の親だけでなく、社会全体で、現状を見つめ直すことが必要です。

子育てが難しい社会
孤軍奮闘する親たち

キレる、無気力、上手に人と関われない――、そんな子どもたちの増加が問題視されています。「子育てが難しくなった」といわれる現代。それは現代の子育てのあり方に原因があるといわれています。

三世代、四世代が一緒に暮らしていた昔の子どもは、家族はもとより近所のおじさんやおばさん、たくさんの子どもたちなど、大勢の人と関わりながら育ちました。そこには、子育てに限らず、みんなで助け合って生きる地域の絆がありました。

しかし、今、そのようなつながりが失われつつあります。少子高齢化が進み、核家族が増える中で、小さな家族に子育ての重圧がのしかかっています。

共働き家庭が増えた今、20～30代で子どもを産んだ人の中には、自分の両親もまだ現役世代という人も少なくありません。保育園などに預けて仕事を続けても、常に送り迎えの時間に追われ、職場の理解もなく、住宅地やアパートでは泣き声や騒音に気を遣う日々。孤軍奮闘する中で余裕を失い、周りが見えにくくなっているのかもしれません。

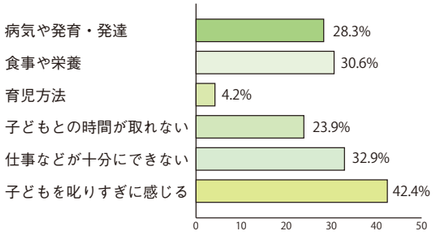
「子育て」を知らない
親になれない親たち

一方で、「親になりきれない親」の出現も指摘されています。かつてのように、子育ての知識や経験が自然に受け継がれることは少なくなりました。身近に、親の責任や役割を教えてくれる人がいない中で、どう子育てに取り組んでいいか分からない親が増えています。

その結果、甘やかすことと愛情を注ぐことの区別がなく、難しいことやしんどいことは避けて、ただ子どもをかわいがるという子育てが目立つようになったと言われます。また、子どもの模範になれる親が少なくなっていると指摘する声もあります。

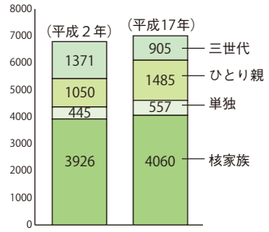
「子は親の背中を見て育つ」といいます。子どもにとって人生で最初の先生は親です。一方で、親も親として成長していかなければいけません。親子が共に成長できる子育てを実現するために、どうすれば良いのか。社会全体で考えなければいけない問題です。

○子育てに関して日常悩んでいること（就学前）



［平成21年子どもと子育て家庭の状況アンケート調査（内子町）］

○内子町の世帯構成別推移



［平成17年国勢調査］

一生懸命だからこそ、しんどい。でも時には冷静に見つめ直して――

シングルマザーとして3人の子どもを育てる亀井さん。母親としてたくさんの悩みを抱えながらも、正面から向き合ってきました。自らの経験を振り返り、いま子育てについて思うことを聞きました。

子育てに悲鳴を上げるお母さんが増えています。初めて子どもが生まれた時、親は何も分からないのに、子育ては待ったなし。特に核家族の場合は、身近に助けてくれる人の存在もなく母親は孤立しがちです。私もそうでした。

私は専業主婦として3人の子どもを育ててきました。夫の帰宅はいつも深夜。家事も子育ても、どんなに頑張っても、主婦なら当たり前と評価されず、人として認められていないような気がしました。いつの間にか私は、子どもを輝かせることで母親として認められようとしていました。

ある幼稚園の合格発表の後、娘が私に「お母さん、うれしい？」と聞いてきました。娘は受験の意味も分からないまま、ただ母親の私を喜ばせようと頑張っていたのです。今、思うと「なんて母親だったんだろう」と涙が溢れてきます。でも、その時は娘の気持ちにも親の身勝手さにも気付けませんでした。

理想の母親になろうと無理をして、できない自分にイライラし、子どもにあたったこともあります。子どもの寝顔を見ては後悔する日々が続きました。一生懸命だからこそ、お母さんはしんどくなるのだと思います。

離婚後、女手一つで子どもを育てるために私は働きました。汚れた格好で作業する姿を見せたくなくて、近付かないよう叱る私に、子どもはおかまいなしに寄ってきました。そして、「手伝いたいんよ」と言いました。うれしくて涙が出ました。子どもは完璧な親を求めているわけではありません。いつだって、そばにいたいのです。親は子どもに、なかなか百点を付けてあげないけれど、子どもはいつも親に百点を付けてくれます。

その後、私は子育てについて勉強しようと発達心理学を学びました。子どもの成長に必要なことが分かれば、親としての役割も見えてきます。親も親になるための勉強が必要なのです。

今、自分の子育てを振り返りあらためて周りを見ると、いろいろなことに気がつきます。

以前、子どもが通っていた幼稚園の先生が、こんな話をしました。たまに「お弁当の日」があると、園児は普段より喜んで食べるそうです。でも、最近は手の込んだお弁当が多く、お母さんたちからは「作るのが大変だからお弁当の日を減らして」と言われるそうです。手が込んでいなくても子どもは喜んでくれることを、お母さんたちも分かっているはずなのに――と。

子育てをしていると、毎日余裕がなくなります。でも、時には自分の子育てを見つめ直し、冷静に考えることも必要だと思います。

亀井 美香（みか） さん（47）
内子19第2

◉ profile
家業の手伝いと塾講師をしながら一男二女の子育てに奮闘中。保護者会や愛護班などにも積極的に参加するなどリーダー的役割を果たす。「親同士がつながって笑顔になれる場をつくりたい」と話す。

「親のあり方」とは

子育てが難しいといわれる現代で、見失われそうになっている、親のあるべき姿。かわいいわが子の成長のために、親が果たすべき役割とは、どのようなものなのでしょうか。全国を飛び回り児童の健全育成に携わる鈴木一光さんに、お話を聞きました。

「江戸しぐさ」に学ぶ

文化・文政の時代、江戸には百万を越える人が住んでいました。武士と町人の割合は半々。町人は狭い下町で、どうすれば互いに快適に暮らすことができるかを考え、町内で話し合ってルールを定めたそうです。これを「江戸しぐさ」といいます。

例えば、狭い通りや路地を歩いていて、向こうから来た人とすれ違う時は、右肩を少し後ろに引いて、体全体を斜めにして歩きます。相手も同じ身ごなしをします。そうすると双方がぶつからずスムーズにすれ違えます。このしぐさを「肩引き」といいます。

また雨や雪の日に傘を差しているときは、互いに自分の傘を外側に少し傾けます。これが「傘かしげ」です。

この他、目つき、言葉遣い、ケンカの作法まで、さまざまなしぐさがありました。そしてこれから世の中に出ていく子どもたちにも、他人を不快にしないためのルールを親や周囲の大人が教えました。

親は、誰しもわが子が一番かわいいと思っています。でも他人がかわいがってくれるかというと、別問題だということを江戸の人々は分かっていました。だから社会の常識に従って、他人に迷惑を掛けないように、周りの人に愛されるように育てたのです。

親は子どもを無条件で愛すると同時に、しつけていかなくてはなりません。「保護と育成」です。子どもがかわいいからといって、過剰に保護し続けていてはいけません。

最近は、子どもに好かれたいからと、叱ったり注意したりせず、親しく接する偽物の「親接」がはびこっていませんか。

発達段階に適した接し方

江戸時代の寺子屋では、子どもの発達に応じて学ばせる手法が、すでに確立されていたといいます。師匠方の目安として、「三つ心、六つ躾、九つ言葉、文十二、理十五で末決まる」ということわざが掲げられていました。

3歳までは愛し育み、優しい心の基礎をつくる。物心がついてから6歳くらいまでにしつけの基本を終えておく。9歳くらいになったらあいさつ・世辞が言えるような言葉遣いを教えておく。12歳までには読み書きを身に付ける。最新の自然科学や理屈は15歳からでよい――。これは現代の発達課題論の内容とほとんど一緒です。

子どもとは、大人に向かって発達を続けている途中の人です。その年齢に従って、大人が子どもを保護したり、育成したり、支援したりする内容が異なります。0歳の時には、抱っこして、甘えさせて、全面的に親が介護します。その内容と、15歳の時の支援の内容は当然違っています。これが、子どもの発達段階における親の役割の変化です。この変化をきちんと意識して接しなければいけません。

例えば、早い方がいいと、脳が発達していないうちから無理に幼児教育などを行っても、歩けない0歳児に階段を昇らせようとするようなものです。子どもにとっては苦痛でしかありません。一方、一定の年齢になったら、冷静にある程度のことは一人でさせて、遠くから見守る愛情を持つことが大切です。

大人が子どもを見守る意味

「目は口ほどに物を言う」といいます。赤ちゃんが、お母さんのおっぱいをじっと見ていたら、お母さんは「おなかがすいているのだな」と分かります。そうやって、言葉を話せなくても、親とコミュニケーションを取ろうとしています。でも、最近は子どものそばにいても携帯電話などを操作していて、子どもを見守ることを忘れている母親も見かけます。だから最初から親を信頼することなく、自分の好きなように生きるという若者が増えているのです。

現代の親は、子どもに慣れ親しんでいません。昔は弟や妹、いとこ、友達の弟妹まで一緒に遊んでいました。その中で、自然に子育ての文化が伝承されていました。しかし今、初めて子どもを産んだお母さんは戸惑います。どうしていいか分からないのです。

そんな時に、子どもを通して、お母さんに親のあるべき姿を教えてあげる存在が必要です。周りの人でも、行政でも、気付いた人の方から声を掛けてあげてください。

親と子は同じ年です。子どもが生まれた時、親としての経験も0歳から始まります。

長い目でみたら、手を掛け目を掛けて、子どもを育てる期間は意外と短いものです。でも初めての親には、それが見えません。その経験のある年長者が、展望を開いてあげてほしいと思います。

戦後の日本は、貧しい中で家族や隣近所が助け合って子育てをしてきました。今は、当時に比べれば格段に豊かになり、文化的になりました。ただ、それと引き替えに時間を失いました。

ある調査では、年収が600万円を超えると、それ以上いくらあっても、感じる幸せの度合いはほとんど変わらないそうです。お金の量は、幸せを保証しません。

人は愛する人と一緒にいる時に、幸せを感じます。特に子どもは、小さい時ほど親と一緒にいたいものです。大人自身が自分の価値観をもう一度振り返り、親のあり方を見つめ直すことが大切だと思います。

財団法人児童健全育成財団
理事長　鈴木 一光（かずみつ） さん

profile
昭和22年生まれ。他に財団法人児童育成協会（こどもの城）理事、学校法人神戸学園神戸幼稚園理事長を務める。「テレビ寺子屋」講師。上智社会福祉専門学校および神奈川県立保健福祉大学非常勤講師。著書に『福祉心理臨床』（共著・星和書店発行）他多数。平成10年、内子座で開かれた児童館・児童クラブ全国大会で基調報告。その後も子育て講演会などを開催

子育ての先輩に学ぶ

昔と今は違う——。子育てを考える時に、よくそう言われます。
でも、いつの時代も子育ては大変だったはずです。
親はその環境の中で、愛するわが子を育てるために一生懸命でした。
自分が子どもだった頃の、親の姿。若き日の、子育ての経験。
人生の先輩のお話に、現代に通じる子育てのヒントを学びます。

稲井 冨榮（とみえ） さん（78）
内子15

毎日弁当を作ってくれた母
特別な日の卵焼きは
今も忘れられない思い出
親の姿から多くを学び
地域で伸び伸び育った

私は昭和9年生まれです。家は農業を営んでおり、両親は朝早くから夜暗くなるまで畑で働いていました。特に母親は、毎朝、畑に行く前に食事の支度や洗濯をし、夜も遅くまで繕い物などをしていました。子ども心に「お母さんはいつ寝るんじゃろ」と思ったものです。

親が難儀する姿を見て育ったので、言われるまでもなく、できることは何でも手伝うことが自然と身に付きました。私は7人きょうだいです。弟や妹の世話は当たり前。学校から帰ったら、炊事や風呂用の水を井戸からくみ上げるのが日課でした。朝は暗いうちに起き、掃除や朝食の支度を手伝いました。その頃は麦ごはんが主でしたが、火をおこし、ごはんを炊くだけでも、2時間近くかかりました。みんなで協力しなければ、ごはんを食べられなかったのです。

傍らで母親は、家族みんなの弁当を作っていました。もちろんおかずは質素です。家ではニワトリを飼っていましたが、卵は風邪を引いたときくらいしか食べさせてもらえません。でも、何か特別なことがあった日は、母親がこっそり卵を隠しておいて「お父さんには内緒よ」と卵焼きを作ってくれました。今でも忘れられない思い出です。

最近は、子どもの遠足に、コンビニで弁当を買うようお金を渡す親もいるそうです。でも、たとえ質素でも、母親が自分のために作ってくれるだけで、子どもは感謝すると思います。

私が子どもの頃は、社会全体が貧しかったですが、みんな伸び伸びしていました。今は物質的には恵まれていますが、子どもは勉強が大変そうです。伸び伸びと遊べなくなって、少しかわいそうな気がします。

私は今、小学校でプールの管理人をしたり、保育園を訪問したりしているので、子どもと触れ合う機会が多くあります。子どもと一緒に、童心に帰って遊ぶと、みんな喜んで慕ってくれます。その中で一言か二言、子どもたちに何かを伝えることができればと思います。

駄場 ミツ子 さん（74）
立石

夫婦、二人三脚の子育て
苦労もあったけれど
子どもの成長が喜びだった
今しかできない子育て
我慢も楽しんで

私は昭和13年生まれです。小さい頃から手仕事が好きで、中学卒業後は、洋裁学校へ進みました。2年目は仕立ての注文を受け、収入を授業料に充てながら通いました。21歳の時、衣料品の行商をしていた夫と結婚。私たちは新居を構え、夫婦で裸一貫からスタートしました。

昭和35年に長女を出産。予定日までに受注していたスーツを仕上げなければと、ミシンに向かっていた最中に陣痛が始まりました。脂汗をかき、痛みをこらえながら、何とか最後まで縫い上げました。二人目が生まれてからは、上の子を横で遊ばせ、下の子をおぶって仕事をしました。でも肩が凝ったなどと感じたことはありません。そのくらい毎日一生懸命でした。

夫は炊事や子守などをよく手伝ってくれました。当時はまだ、男性が家事を手伝うことは珍しく、周囲から冷やかされたこともありました。でも大人は夫婦二人だけ。助け合わないとやっていけなかったのです。

子育てをする上で大切にしていたのは、子どもたちを自立させることです。小学校に入学する時は、「お母さんは一緒に行かれんのじゃけん、頑張って勉強してきてお母さんに教えてよ」と送り出しました。見ているだけの方がハラハラします。でも、子どもを信じて見守っていると、自分なりに考えてきちんと行動するようになります。

振り返れば苦しいこともありましたが、子どもの成長が何よりの喜びでした。

先日、テレビで「もっと楽（らく）に子育てできるように支援が必要だ」と話していました。でも、どこまで楽を求めるのでしょう。昔と今を簡単に比べることはできませんが、今のお母さんたちは、ずいぶん恵まれているような気がします。確かに子どもが小さいうちは我慢が必要です。でも、その我慢も含め、「子育ては今しかできんのじゃから、楽しんで」と伝えたいです。「楽しむどころじゃない」と言われそうですが、ずっと続くわけではないのですから。

一生懸命に生きる親の姿が子どもの生きる力になる

昭和初期、人々は物がなく貧しい中で子育てをしてきました。親は家族を養うために一生懸命働き、子どもはそんな親の姿を見て育ちました。そうして育った人たちが、国の発展を支え、近代日本を築いてきました。しかし今、豊かな社会の中で、親の一生懸命な姿が子どもに伝わりにくくなっています。

かつては親の農作業を子どもも手伝っていました。家庭でも、草履を編んだり、手間のかかる家事をこなしたり、忙しく働く親の姿を間近で見ていました。今は、子どもが親の働く姿を間近に見る機会は少なくなりました。また、なるべく子どもには苦労する姿を見せたくないと考える親もいます。

しかし、子どもは親の姿を見習いながら、自分がどう生きるべきかを学びます。一生懸命に生きる親の姿を、子どもに示すこと。それが子どもの生きる力になっていくのではないでしょうか。

子育てを支援する

子育て支援とは、「親の子育てを支える」こと。
親だから与えられる愛情、親だからできるしつけ、親だから伝えられる生き方――
その役目を果たせるように、さまざまな支援の手が差し伸べられています。

「内子で育てる」

現代は、親の役目や子育ての知識が、家庭や地域の中で自然に継承されることが少なくなりました。このような中で、内子町では、親の子育てを支えるために、さまざまな支援の手が差し伸べられています。

この支援は、親が親として子育てに向き合うことができる環境を築くためのもの。「内子で子どもを育てたい」と思われるまちをつくっていくために、さらなる取り組みが求められています。

「内子を育てる」

人は、社会の中で生きていきます。それゆえに、子育ては身近な地域との関わりなくしてはできません。

だからこそ子育ての問題は親だけではなく、町全体で考えるべきこと。移り変わる時代の中で、内子の子育ての土壌を、みんなで育てていかなければなりません。

「内子に育てる」

子どもたちの健やかな成長のためには、子育てを支援するための施設や制度も大事ですが、内子町の風土や、そこに暮らす人々の人情も大きく影響します。

子どもたちは、この内子に育ちます。「内子の子ども」の成長を、まち全体で支えていくことが大切なのではないでしょうか。

◉ママの声 「子育て支援」を利用しています

真美（まみ）さん（35）
彩里（あかり）ちゃん（5つ）
澪里（みおり）ちゃん（2つ）

鬼塚さん親子◉内子18第2

友達や先生に相談し心配事を解決

友達に誘ってもらって、親子で児童館を利用するようになりました。心配事があっても、他のお母さんたちや先生に気軽に相談できるので、とても安心できます。

祐子（ゆうこ）さん（32）
心春（こはる）ちゃん（5つ）
日和（ひより）ちゃん（2つ）

松友さん親子◉内子19第2

児童館利用し、親子で気分転換

子どもと一緒に児童館で遊んだり、児童クラブに参加したりしています。子どもは目新しいおもちゃがあり、私はママ友に会えるので、親子とも気分転換できます。

内子町の子育て支援

子育て支援センター

主に子育て中の親を対象に、交流の場づくり、子育て情報の発信、相談、講習会などを開催しています。子育ての先輩方による、ベビーシッターや子育てサポーターの制度もあります。いつでも、誰でも、気軽に訪れることができる子育て支援の拠点です。

児童館・放課後児童クラブ

遊びを通して、健康で心豊かな子どもの成長を支援します。異年齢の子どもや高齢者との触れ合い活動、母親クラブの育成、子育て相談、交流の場づくりなど、地域に根ざした活動を通じ、信頼できる大人がいて、子どもたちが自由に出入りできる居場所をつくります。

保育園

働く親を支える保育園。共働き世帯の増加や働き方の多様化などを受け、保育時間の拡大、乳幼児の一時預かりなど、支援を拡充しています。

幼稚園

家庭で育児をしている親を対象に、遊びや仲間づくりの場を提供し、子育て情報の発信、相談を行うなど、子どもの健やかな成長を支援しています。

保健センター

初めて子どもを持つ若い世代などを対象に、妊娠・出産・育児などを学ぶ機会や集いの場を提供しています。発達に関する相談にも応じます。

◉profile
町の幼児施設に40年間勤務。定年で退職後も読み聞かせボランティアなどとして活躍中

子育てに悩んだ時は、手を伸ばして

越智益子（ますこ）さん（65）内子11

「幼児教育は母親教育」といわれます。子育てを通して、親に、親のあるべき姿を伝えていくことが重要だからです。例えば、小さい頃にテレビに子守をさせて、親が必要な手を掛けないでいると、その「つけ」は子どもが成長してから表れます。手を掛けるべき時、しつけるべき時、見守るべき時、子育てにはそれぞれ時期があります。でも初めて親になった時は、それを知りません。子育てを経験してきた人たちが、周りからも支援の手を差し出すことが必要です。

内子町には、さまざまな支援の手があります。声を掛ければ応えてくれる地域の人たちも大勢います。お母さんたちも、子育てに悩んだ時は、一人で抱え込まないで「助けて」と手を伸ばしてください。自分から一歩踏み出せば、子育てはずっと楽になります。

子育てと向き合う

日々の生活に追われていると、
何が正しいのか分からなくなることがあります。
子育てもそう。
一生懸命で、立ち止まる余裕はありません。
ただ、子育てに正面から向き合うことは大事な親の務め。
その真剣な姿を子どもに見せることも、
子育てのひとつなのです。

古里で子どもたちを育てる　夫婦で選んだ子育てのカタチ

自然の中で遊ばせたい　古里への帰郷を決意

イチョウやモミジなど山々の木々が鮮やかに色づき、たわわに実ったオレンジ色の柿の実が斜面を彩る川登地区。放射線技師として、松山市内の病院に勤務する植田直人さん（36）は今年9月、市内の自宅を引き上げ、家族と共に、実家のある川登に帰ってきました。

植田家は、夫婦共働き。妻真利さん（38）も、市内の産婦人科の看護師です。

自宅も勤務先も松山市。何の不便もない二人が古里へ帰る決意をしたのは、3人の息子の子育てを考えてのことでした。

長男偉斗くん（小3）と、二男健斗くん（小1）を出産した後も、仕事を続けている真利さん。二人を保育園に預けながら働きました。

「小さい時はよく熱を出すんです。でも、仕事柄すぐに迎えに行けないことが多いので病児保育のある病院併設の保育園や、遅くまで預かってくれる民間の保育園に預けていました。私のお給料は二人の保育料に消えるだけ。働くために預けるのか、預けるために働くのか、分からなくなることもありました」と振り返ります。

偉斗くんが小一の時、三男詠斗くん（2つ）が誕生。育休が終わって働くようになってからは、詠斗くんは保育園で、お兄ちゃんたちは放課後児童クラブなどで過ごしました。

近くに子どもだけで遊べる場所がなかったといいます。毎朝、家を出たら、帰ってくるまで学校との往復だけです。「帰ればテレビやゲームばかり。そんな環境が子どもにとって良いのだろうかと疑問でした」と真利さん。さらに、「男の子は外で元気に遊びたいもの。でも家の前でボール遊びなどをすると、近所の塀や車などにぶつけて迷惑を掛けるでしょう。いつも〝気を付けなさい〟と言っている自分も嫌でした」とも。

直人さんも、「自分も田舎で育ったから、山や川や自然の中で、元気に遊ばせてやりたいと思いました」と同感でした。

話し合い、家族全員で古里に帰ることを決意。両親と同居することにしました。

大家族に見守られて――古くて新しい植田家の子育て

父一仁（かずみ）さん（65）、母みさかさん（63）、祖母モ、コさん（89）と8人で、川登での新しい生活が始まりました。最近では珍しい、四世代同居の大家族です。

通勤距離が延びた分、帰宅時間は遅くなりました。それでも真利さんは、「子どもたちは帰宅すると、おばあちゃんに学校であったことなどをよく話しているようです。おじいちゃんには将棋を教えてもらったりしています。安心して子どもを見てもらうことができるので、以前のように時間に追われるストレスは感じなくなりました」と表情は穏やかです。

直人さんは、「子どもの頃は土を触ったり、体を動かしたりして、いろいろなことを体験することが大事だと思います。けがをしたり、傷ついたりすることもありますが、それも経験。そうやって自分で考える力が身に付いていくのですから」と、失敗を恐れず、何にでも挑戦する子どもになってほしいと願います。

子育ての環境や方法は、人によってさまざまです。大切なのは、子どもの未来を真剣に考え、正面から子育てと向き合うこと。その姿を見て、子どもは育っていくのです。親子の絆は、深まっていくのです。

古くて新しい植田家の子育て。そこには、少子高齢化時代の子育てのヒントが隠されていました。

◉植田さんファミリー
父：直人さん（後列右）　母：真利さん（後列中）
長男：偉斗くん（前列右）　二男：健斗くん（後列左）　三男：詠斗くん（前列左）